

彙報

吉田順一。

このように、歴史学、言語学、人類・民族学、考古学の各分野から専門家が出席したことが、この会の特色であった。

第5回「アルタイ学・中央アジア研究者集会」

岡田英弘

いわゆる「野尻湖クリルタイ」は、今年は七月十四日(月)から十八日(木)まで、その第五回の集会を開くに至った。会場は例年の如く長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルで、次の五十七名という、空前の多数の参加を見た。

阿南惟敬、青木富太郎、榎本方雄、恵谷俊之、福田邦弘、後藤晃、後藤富男、萩原淳平、浜田正美、橋本勝、Joseph S. Hayes, Jr.、日比野丈夫、細谷良夫、池上一郎、伊瀬仙太郎、石橋秀雄、伊藤幸一、伊東良昭、泉靖一、禿猛繼、神田信夫、加藤和秀、菊池俊彦、小玉大円、小玉新次郎、前嶋信次、間野英一、松寿男、松本幹男、松村潤、水谷あもり、護雅夫、森川哲雄、村上正二、中村裕一、中根千枝、小田寿典、小谷仲男、岡田英弘、小貫雅男、大沢陽典、長田夏樹、斎藤淑子、坂本勉、沢田勲、島田正郎、鳩崎昌、志茂碩敏、平祐輝、田山茂、徳永康元、植村清一、若松寛、家島彦一、山田信夫、山口瑞鳳、

第一回は主として、この会独特の行事である Confessions が行われた。ここで報告された各人の近況、抱負などいろいろ、目ぼしいものを拾って見る。山田はウイグル経済文書を研究、また神田と共に『白鳥庫吉著作集』の編集に従事。松村は、神田、岡田と共に『紫禁城の栄光』を刊行し、また護・阿南・岡本らと共に『元史兵志』を会読。松田は、從来の時代区分論に対するものとして、地域差にもとづく歴史構造論の意義を強調した。青木は清代ハルハ史を研究中。神田は『清太宗實錄』諸本の系統関係について考えた。萩原は「中国」の概念の変遷について論考を発表、またチャハルのリンダン・ハーンを研究中。岡田は蒙古中世史の文献学的研究を続行中、また今秋からシントン大学で蒙古学を教える予定。田山は海外における日本語文献の利用状況について報告、また『蒙古の法と社会』の研究に対し、青木、坂本是忠と共に毎日学術奨励金を受けた。護は『古代トルコ民族史研究』『遊牧騎馬民族国家』『絹の道と香料の島』を刊行、トニーカク碑文の編年を研究中。菊池は北海道

大学北方文化研究施設の実情と、その考古学部門の成果を紹介。細谷は八旗の性格の変化を追跡して、それが雍正朝を境としていることを指摘。阿南は太祖・太宗朝の八旗を研究。恵谷はハイドの乱について論文を発表。橋本は中期モンゴル語の西部方言と、アフガニスタンのモガール語との関係を中心に持つ。家島はイブン・ファドラーの『ウォルガ・ブルガール旅行記』の訳註の刊行を準備中。大沢は『正史北狄伝訳註 上・下』の編集を担当。小谷は水野調査隊の発掘報告書の編集に従事。石橋は旗地の問題を追究中。長田は、『華夷訛語』の女真語のうち丙種本のものは満洲語の直接の祖先と認められるが、乙種本の分はナナイ語（シリド語）に近似する別系統の方言であるとの見解をいだく。島田は『蒙古律例』の逐条的研究を進めている。村上は『着き狼の国』を刊行。前嶋はイブン・バトゥータの『旅行記』の全訳を計画中。山口は「蘇毗の領界」を準備中。後藤（富）は『内陸アジア遊牧民社会の研究』を刊行。

研究発表に移り、阿南の「八旗制度の性格」があつた。八旗はそのまま軍事組織ではなく、狩猟、行政組織である。兵力としては、各ニル五十人の甲士（騎兵）だけが実戦に参加するもので、ヌルハチ時代の総数は約一万であった。しかし戦時の指揮系統は、平時の旗→ニルの系統とは異り、八旗の各ニルから同数ずつ出た甲士で部隊が編成され、その上に

指揮官が任命された。

第三日の午前には、研究発表が続けられた。斎藤の「トルコ共和国における Lajiklik の原則について」は、一九三一年ケマル・アタテュルクの発表した共和人民党綱領のなかの基本的性格六条の一つ、ライクリクを、宗教を政治に従属させる俗権主義と定義し、これがトルコ革命の中心理念であったとした。

志茂「ガザン・カン政権の性格について」は、イル・ハン権力の発展を分析し、当初はイラン高原には多くのモンゴル部族が割拠して、イル・ハンの統制力はそれらの内部に及ばなかったが、ガザン・ハンの手によつて諸部族が次々と解体され、はじめてイル・ハンは帝国としての実体を具えるに至ったとする。

小貫「モンゴル文芸概説」に見られる民族文化の問題について」は、ダムディンスルンの著作に見られるモンゴルの伝統文化擁護の立場と、マルクス主義社会革命の理論とがなぜ調和しうるかを説明した。

午後は特別講演として、泉の「シャマニズムについて」があり、シャマニズムの世界的分布、その型、共通点などを明快に説き、前年の韓国における現地調査の知見の一端を紹介して、多大の興味をそそった。

夕食後、泉はさらに現地調査のスライドを示して補足説明

を加えるところがあつた。

第四日の午前は、Symposium 「元朝秘史をめぐって」があり、岡田の司会で吉田、橋本が歴史学、言語学の立場からそれぞれ報告を行った。

四年春期東洋學講座講演要旨

第二二七—二二〇回 五月八・一五・二二二九日

—南蛮文化の伝来について

1

向が強く、史料性の点では他の三者に及ばないことを指摘した。橋本は『秘史』の言語の中から古い動詞語尾-munを抽出し、これと西方文献に見られる-miとを考え合わせて、-mu～-mu～-mu～-munという系列があつたのではないかと推測した。

南蛮風俗が天文・弘治以後の一世纪近くの長い間に浸透したというよりは、莫然と考えられているけれども、それは眞実ではない。長崎地方に開港する限りは、元龜元年に開港して以来一、三十年間に南蛮風俗がその住民の間へ急速に行き渡つたのであるが、全国的に流行したのは十六世纪の末以後である。

午後の EXCURSION には、バスで京都大学の辻が峰ヒーツ
テを訪れた。夕食後の総括討論においてはこの会の評価と運
営についての希望がのべられ、第五日の朝食後、正式に散会
した。

豊臣秀吉の朝鮮出兵の大本營が肥前前の名護屋城に置かれ、秀吉自身が在城した文禄元年六月末から、翌二年九月末に大城へ引きあげるまでの一年三箇月余の間には、大小の諸侯が名護屋に在住し、また京坂地方や博多の富商達も屢々招致せられた。当初は秀吉のイエズス会宣教師に対する弾圧政策が続行せられていたので、名護屋在住のキリスト教信者諸侯などもそれを憚つて、名護屋より三〇〇リーグの近距離にある長崎の在日本イエズス会本部を公然と訪れることがなかつた。